

ポルトガル語の再帰代名詞 *se* の用法中、受動態を表す *se* に就いて

Em torno dos usos de *se* na língua portuguesa: na voz passiva e como pronome reflexivo

住 江 淳 司

Junji SUMIE

はじめに

“vende(m)-se casas.”（売家あり。）という例題に見られるように、代名詞 *se* は主語不確定の印か、受動態を表す受動小語か、を判断する確実な基準がブラジル人文法学者の間でも存在しない。

本稿では、現代ブラジル人作家が “vende-se casas.” と動詞を単数扱いにしているか、あるいは名詞 (*casas*) との一致を重視して “vendem-se casas.” とするかを明確にしようとするものである。

また、この両説に関する現代ブラジル人文法学者の論議にはどのようなものがあるか、の分析を以下の章で試みる。

I 学術的規範 Norma Culta において

“estudaram-se as lições.”（教課を履習する。）という文では、*as lições* は動詞の主語とみなされる。入念な語法（*linguagem cuidada*）においては動詞を単数にするのを避ける傾向がある。⁽¹⁾ もし、*as lições* が動詞の主語として考えられるのなら、この形 “estudaram-se as lições. = As lições foram estudadas.” は受動態になる。一般に、現代ブラジル人作家が用いる学術的範疇では、この受動態が採用されている。⁽²⁾ 若干の例文を挙げると、⁽³⁾

“... e já se avistavam os contornos da serra que iriam subir.” (J. L. do Rego)

（それから彼らが登ろうとした山の輪郭がもう遠くに見えた。）

“Quando lhe disseram que também se caçam borboletas e andorinhas, / ficou muito espantado ...” (C. Drum. de And.)

（蝶やつばめも捕ったと彼に言ったら、とても驚いた。）

“Lêem-se nele frases como estas ...” (M. Bandeira)

（そこにこのような文章があります。）

“Procurei o mostrador: do ponto em que me achava não se percebiam os números.” (Grac. Ramos)

（私は文字盤を探した。私がそれを見つけた場所からはナンバーは見えなかった。）

II 通俗用法 Uso Popular において

代名詞 *se* を伴った受動態の通俗用法は、特に商業用の看板によく見うけられる。例えば、“Aluga-se quartos.”（貸間あり。）、“Compra-se movéis usados.”（中古家具買入れます。）、“Aceita-se encomendas.”（修理請け負います。）などである。これらはポルトガル本国やブラジルの町かどで飽きるほど見かける例であるが、動詞を単数にするのは現代ブラジル人作家の間でも明らかに少数派に属する。代名詞 *se* を伴う受動態は、無意志の事物を受動主語にして、この主語の数に従って他動詞は第

三人称の単数あるいは複数になる。ところが、受動主語が複数であるにもかかわらず、動詞を単数形で用いる場合がある。これは受動主語 *se* が主語不確定の *se* に流用された例である。ここに引用する現代作家の例文でも、通俗的影響がはっきりと表れている。⁽⁴⁾

“Decerto alguma cidade maior . . . iriam parar mais tempo e *se abriria as janelas para arejar o vagão . . .*” (M. de Andrade)

(きつとどこかの大きな町だ。長く停車するだろう。それから車両に風を通すために窓があげられるだろう。)

“*Ouvia-se já bem distante as campainhas do cabriolé, como uma música que se consumia.*” (J. L. do Rego)

(弱くなっていく音楽のように、軽二輪馬車の鈴が、もう遠くの方に聞える。)

“Muito *se comentou* na rodinha da praça, no curso em casa de Angelita, em todos os pontos de reunião, *os amores* de Noemi e Roberto, a inesperada partida de João Jaques.” (Raq. Queir.)

(広場での人の集りでも、アンジェリタの家での勉強会でも、どこでも人の集まる所では、ノエミとロベルトの恋愛、ジョアン・ジャケスの突然の旅立ちの話でもち切りだった。)

“Fiz tantos versos a Teresinha . . . / *Versos tão tristes, nunca se viu !*” (M. Bandeira)

(テレビニヤのためにたくさんの詩をつくった。こんなにも悲しい詩は初めてだ。)

“O trigo, consumido pelo fogo, agora seria apenas terreno preparado para novas plantações. Não houve tempo para *se reparar os estragos* da fazenda.” (Diná Silv. Queir.)

(焼かれた小麦畑は、今は新しい植付けのために用意された土地に過ぎない。農園の荒廃を修復する時間がなかった。)

III アンテノル・ナスセンテス、サイド・アリ両ブラジル人文法学者の見解

近年、現代ブラジル人文法学者の大半は代名詞 *se* の受動態としての機能の方を支持している。アンテノル・ナスセンテス教授がブラジル文法用語命名法制定に応じ、彼の名著『国語』(O Idioma Nacional)⁽⁵⁾ を改訂した際、受動小語 *se* によって示される主語不確定の文章では、複数形の直接目的語の牽引(atração)によって動詞はその直接目的語と一致して複数形になると主張した。たとえば、“*Vendem-se casas.*” (売家あり。)などの場合で、同教授によるとこの例題は態動的意味があり、受動的意味を持たないとした。それは、“誰とはわからないある誰かが家を売る”のであって、“家は誰かによって売られる”のではない、と説明している。⁽⁶⁾ その一つの証明として、通俗用法では動詞を単数にし、主語不確定の典型的な構文を形成している。また、名詞は動詞の後に来て直接目的語の自然な位置をとっている。

サイド・アリ教授は、動詞と目的語との一致の固執は、混交 (contágio) によるものであると説き、はっきりした再帰の意味を持つ代名動詞文 (本来の再帰の意味を持つ代名詞を伴った再帰動詞) の影響であるとした。⁽⁷⁾

アンテノル・ナスセンテス、サイド・アリ両教授のように、この種の文が能動的意味を持ち、*se* は主語不確定の印になると主張する文法学者でも、伝統文学の中では基本的には動詞の次に来る名詞との一致により文の動詞を複数にするよう義務づけている。

次に、ルイス・デ・カモイス著『ウズ・ルジアダス』の中から、古語表現のめずらしい用例を示す。
“E como por toda África se soa, / lhe diz, os grandes feitos que fizeram . . .” (Lus., II, 103)
(そして、彼らポルトガル人の偉大な軍功は全アフリカにとどろいている。)

“Aqui se escreverão novas histórias Por gentes estrangeiros que virão.” (Lus., VII, 55)
(ここに、きたるべき異国人らにより新しい歴史が書かれるでしょう。)

IV 近代主義者 Os Modernistas の立場

近代主義作家達は“Aluga-se casas.”という表現をめったに用いない。そのかわりに *casas* という名詞に一致して動詞を複数にする方を採用している。

ライムンド・バルバジニョ・ネットはその著『近代主義文学規範に関して』⁽⁸⁾の中で、ジョルジュ・アマドの小説『ジュビアバ』の例を引用している。つまり、1947年版でアマドが単数にしていた動詞 *ouvir* を1957年版以降では複数にしている、という点である。

“Os fífós apagavam, não se *ouvia* vozes nas casas.” (ed. de 1947).

“Os fífós apagavam, não se *ouviam* vozes nas casas.” (ed. de 1957).

(石油ランプは消え、家の中で声はしなかった。)

しかし、近代作家の中でも例外的に動詞を複数形にしていない作家もいる。たとえば、エウクリデス・ダ・クニャで、その著書『奥地』の一節では、自動詞を用いた主語不確定の構文が、同一文中で他動詞を用いたもう一つの主語不確定の構文と対比させて用いられている。

“Salta-se do trem; transpõe-se poucas centenas de metros entre casas deprimidas . . .”⁽⁹⁾

自動詞

他動詞

直接目的語

(汽車から降り、数百メートル足らずのところにあるみすばらしい家々の間にかくれた。)

V 結 論

代名詞 *se* を伴った再帰の意味を含まない直接目的語を持つ他動詞構文では、近代ブラジル人文学者の大半は受動形を用いる。文学用語では、文の主語の役目をする名詞と文の動詞が一致して、それが一般に伝統的用法となっている。

“Aluga-se uma casa.” (受動態)

主語

“Alugam-se casas.” (受動態)

主語

もし、文の動詞が間接目的語を持つ他動詞か、自動詞の場合は受動態は存在しない。つまり、主語不確定構文の場合である。そして *se* は主語不確定の印とみなされ、もちろん文の動詞と名詞の一致も起らない。

“Devagar se vai ao longe.”

自動詞

(急がば回われ) 主語不確定文

“Lá se gosta de fogueiras.”

間接他動詞 間接目的語

(あそこでたき火を楽しむ。) 主語不確定文

しかし、民衆語的にはこの種の主語不確定構文は、直接目的語を伴った他動詞構文にまで及ぶ。

“Aluga-se casas.” = (Alugam casas.)

この例文の場合、動詞 *alugar* は直接目的語を伴う他動詞で三人称単数形である。名詞 *casas* は複数形で直接目的語の役割を示す。ポルトガル語には、三人称複数形で主語不確定を表す用法がある。

“Dizem que ele ganhou um dinheirão.”

(彼は金をうんともうけたそうだ。)

“Na casa *pisavam* sem sapatos, e falava-se baixo.” (Aníbal Machado)

(くつをはかずに家に踏み込み、小声で話していた。)

従って、“Aluga-se casas.” は三人称複数形の主語不確定構文で書き換えられる。普通、文法規則は動詞を単数にする用法を非難している。が、アンテノル・ナスセンテス、サイド・アリ両教授だけが、この種の文は能動的意味を有し、受動的でない、と主張している。一方、動詞を複数形にすると、たとえば、

“Desfizeram-se as dúvidas.”

(人々が疑問を解決した。)

この場合、動詞は直接目的語 *as dúvidas* (実際はこの目的語は統辞論的にみると文の主語として機能する。)と牽引 (*atração*) や混交 (*contágio*) によって一致する。つまりそれは両文法学者によれば、はっきり再帰とわかる意味の代名動詞文の影響だとしているからである。

この二人の文法学者にとって、動詞が単数形の場合、代名詞 *se* の機能は主語不確定の印である。つまり、誰かわからないある誰かが疑問を解決するのであって、疑問は誰かによって解決されるものではない。

一方、この両者の学説をブラジル人文法学者のソウザ・ダ・シルベイラ教授は誤りとみなし、代名詞 *se* は同教授にとっては断固、受動小語 (受動態の形) である。⁽¹⁰⁾

その上、このシルベイラ学説は、ほとんどすべてのブラジル人言語学、文献学者の学説でもある。筆者もこの説に同調する者である。

注

1. Celso Cunha. *Gramática do Português Contemporâneo*. Belo Horizonte, Editora Bernardo Alvares, 1976., p. 219. Obs. 2^a.
2. Luiz Carlos Lessa. *O Modernismo Brasileiro e a Língua Portuguesa*. Rio de Janeiro, Fundação Getúlio Vargas, 1966., p. 303.
3. *Ibid.*, p. 304.
4. *Ibid.*, p. 305.
5. *O Idioma Nacional*, p. 145. (apud Lessa p. 303).
6. *Ibid.*, p. 145.
7. Said Ali. *Dificuldades da Língua Portuguesa*. Rio de Janeiro, Livraria Acadêmica, 1950. p. 115. (apud Lessa, p. 303).
8. Raimundo Barbadinho Neto. *Sobre a Norma Literária no Modernismo*. Rio de Janeiro,

Ao Livro Técnico, 1977. p. 50.

9. Ibid., p. 49.
10. Sousa da Silveira. *Lições de Português*. 6.^a ed. Rio de Janeiro, Livros de Portugal, 1960. p. 164. 529 (1).

参考文献

1. Ali, M. Said. *Dificuldades da Língua Portuguesa*, 4.^a ed. Rio de Janeiro, Livraria Acadêmica, 1950.
2. Idem, *Gramática Elementar da Língua Portuguesa*, 8.^a ed. São Paulo, Melhoramentos, 1965.
3. Almeida, Napoleão Mendes de. *Gramática Metódica da Língua Portuguesa*, 28.^a ed. São Paulo, Saraiva, 1979.
4. Barbadinho Neto, Raimundo. *Sobre a Norma Literária do Modernismo; subsídios para uma revisão da gramática portuguesa*. Rio de Janeiro, Ao Livro Técnico, 1977.
5. Cunha, Celso. *Gramática do Português Contemporâneo*, 7.^a ed. Belo Horizonte, Bernardo Álvares, 1978.
6. Lessa, Luiz Carlos. *O Modernismo Brasileiro e a Língua Portuguesa*. Rio de Janeiro, Fundação Getúlio Vargas, 1966.
7. Nascentes, Antenor. *O Idioma Nacional*, 4.^a ed. Rio de Janeiro, Livraria Acadêmica, 1960.
8. Silveira, Sousa da. *Lições de Português*, 6.^a ed. Rio de Janeiro, Livros de Portugal, 1960.